ダンロンV3に転生したと思ったらコナンだった

黒川清流

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンガンロンパの世界に転生したと思ってドキドキしていたらコナンの世界にいた春川魔姫（中身転生者）がコナンの世界に巻き込まれてあっちいったりこっちにいったりするやつ

息抜きで作りました。続きはいつかな

目次

殺人事件に遭遇した ―――― 1
トリプルフェイスに遭遇した ―― 17

殺人事件に遭遇した

「…よしっと」

荷ほどきが終わり、段ボールを片付けて伸びをする。

新しく住むことになった部屋を眺めて次はどうしようかなと時計を見る。

時刻は11時頃、早めに始めたおかげか思ったよりも早く終わってしまった。

さてどうするか、両親のところを手伝うにも仕事道具とか色々あったから勝手に触るのもなぁ…

顎に手を当てて悩んでいると別室にいる母親が顔を出した。

「魔姫ー、終わったの?」

「あ、うん。今終わったところ」

「じゃあどこかで何か食べてきたら?この辺も見て行った方がいいし」

「母さんはいいの?」

「私は何か適当に何か食べるから」

「わかった」

母さんと会話を済ませ、出かける準備をする。

「…一応、持っていこうかな」
私は自分の机に置かれているものを懐に仕舞い、家を出た。

さて、そろそろ自己紹介をしたいと思う。
私の名前は春川魔姫。うん、言いたいことは分かる。そこから説明しよう
いわゆる私は転生者だ、前世の記憶はほぼない
前世が男か女かも分からない、ただ漠然と前世の記憶があるだけである。
まぁ、よかったかもしれない。前世が男だったら色々とややこしいことになりそうだし。
前世の記憶が甦ったのは小学二年生の時、あの時は大変混乱した。人一人分の人生の記憶と知識が一気に流れ込んで来たようなものだったのだから、実際知恵熱を起こしてしまい。病院に搬送されるという事態にまで陥ってしまった。まぁ、それはいいか
ふとそばにあるショーウィンドウーで自分の姿を確認する。
足首まではあるであろう赤いシュシュでくくった超黒髪ロング、睨んでいるとでも誤解を受けそうな鋭い赤目に泣き黒子。
はい、ニューダンガンロンパＶ３の春川魔姫です。

前世の記憶が戻ったときに鏡と自分の記憶を照らし合わせて驚いたし絶望した。
私は近い将来コロシアイをしなくてはならないのだろうかと。記憶を思い返せばそんなに愛想のいい方ではなかったのにやたらと子供が寄ってくる。ナイフやみたことも触ったこともないはずの武器を自在に扱える。
保育士と暗殺者の才能である。
いつ集められるかいつコロシアイが始まるのか高校生になってからは特に警戒していた。
だが時がたつにつれてその警戒は消え去っていった。
理由はいろいろあるがまずは経歴である。
さっきのやり取りを見ればわかるが私には両親がいる。親子仲もよく孤児院には行ったことない
そして容姿である。
先ほど顔の説明をしたが実は体つきは割と原作と違うのである。
身長は１６４ｃｍと少し伸びており胸囲がまさかの８７ｃｍ、高校一年生から二年生にあがるまでにまさかの１０ｃｍ増である。下着が全く合わなくなってしまい私も母親も苦笑いである。
原作とここまで変わってしまえばもはや私も疑わない。

この世界はダンガンロンパの世界ではない、だけども生きていた頃の世界でもない。
生きていた頃の世界でこの容姿なら色々言われているだろうし
ここはなんなんだろう、何か原作があるのかな。
街の名前や転校する予定の学校の名前などを思い出してはみるがピンとこない
考えてても仕方ないので近くのカフェに入る。お腹空いたし
このカフェは客の入りはそんなに多くない、平日だからだろうか。それとも喫煙者に配慮されたタイプだからだろうか、入り口には煙草の自動販売機があり喫煙席もかなり多い。
反対に禁煙席は少なくトイレも喫煙席の奥にある。
変わったタイプの店だな。まぁ、私は別に気にしないので静かそうな喫煙席のひとつの席につく、禁煙席には同世代の子達がいて騒がしそうだったから。煙草の臭いがするがまぁ問題はない。
軽食を注文し携帯でも見ながら待っていると視界の端でぱさりと何かが落ちた。
視線を向けるとそれはハンカチだった、どうやら横を通った男性が落としたらしい。
「ハンカチ落ちましたよ」
「ん？おぉ、わるいね」
ハンカチ落とした男性は私が拾ったハンカチを受けとるとそのままトイレへと向

かった。
しばらくすると注文していたパスタが来た。食後にコーヒーを注文し食事を始める。む、意外と美味しい。
食事を終えた後、この辺のことを調べてみる。
意外と犯罪率高いんだねここ、治安良さそうなのに
所々になんとなく見覚えのある名前があるんだよなぁ・・・ でも思い出せない。
というか犯罪率が高いってこわっ、あっさりこの辺でも事件起こったりして・・・ なんてね
そう思いながら残ったコーヒーを飲み干しそろそろ帰ろうかと携帯をしまった瞬間、それは起こった
「ゲボァッ！」
最初は誰かが気分が悪くなって吐いちゃったのかなと思った、掃除するカフェの店員さん大変そうだなぁと思って何気なしにそちらに視線を向けた。
「…え？」
すると先ほどハンカチを拾った男性が一目で致死量と分かる血を口から吹き出していた。
ゴガンッ！

力なく倒れた彼の頭蓋骨の音が、やけに静かに店内に響いた

「ひっ…キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

どこからか悲鳴が上がる。正直私も叫びたいが声がでない。

落ち着かせるために辺りに視線をさまよわせる。

私のように立ち上がって困惑してる人、腰を抜かしている人、座ったままの人

呆然としていると先ほど禁煙席に座っていた同世代のグループにいた少年が遺体へと駆け寄っていった。

「…　だめだ、死んでる」

少年はいたって冷静に呟くと近くにいたウェイトレスさんに警察を呼ぶように告げる。

なんでこの少年はこんなにも冷静なんだ？これは事件なのか？など思うことはあるが私は視線の先にいる少年に釘付けだった。

そうか…　やっと分かった

彼は江戸川コナン、つまりここは…　名探偵コナンの世界だ

即座に警察が呼ばれて容疑者が絞り込まれた。
容疑者は私を含めて四人、私、ウェイトレス、被害者の向かいにいた部下、近くにいた女性の四人である。
というか全く面識ないけど私も容疑者なんだ。というかハンカチ拾ったのを他の人が見ていたからであるらしい
「お名前と職業をお聞きしてもよろしいですか？」
「春川魔姫、高校生」
「えっ!?」
高木刑事が私の職業を聞いて驚く、割と大人っぽい見た目してるからね。
近くをうろちょろしてる少年もマジかよっ!?って顔をしている。
保険証を見せたら納得してもらえた。
閑話休題
やってきた、目暮警部と高木刑事は被害者の部下やウェイトレスを容疑者だと思っているようで私と女性はそこまで注目されてない。ということはこの女性が犯人だな!!!
というミステリーあるあるを思いながら何となく女性が座っていた席を見る。
トイレに近い席で被害者とは向かいな上に三つほど離れている。
…ん？あれ？

ちょっと疑問に思ったことが気になり入り口を確認する。そして今フリーになっているウェイトレスさんに話を聞く。
「ねえ」
「はっ、はいっ!?」
「ちょっと気になったんだけど、あそこの人…」
「……あ、はい。そうです。ずっとそうしています」
うーん、ちょっと待ってよ…ますます信憑性が高くなってきた。
「これは…!」
声のした方を見ると部下の人が座っていた席のソファーの隙間から毒の入った瓶が見つかったらしい、液状で塗るタイプのようだ。
ちょっとの摂取でさっきの被害者のようになるヤバイ物らしい。
ふと気になったことがあって、あるところに私も手を突っ込んでみた。ふむ
さっき被害者もトイレに行ったからつじつまが合ってしまうということで話は署で…って
「なわけないでしょ…」
私が顔を押さえてそう呟くと
「ねえ、どうしてそう思ったの?」

コナンが私に疑問を持った顔をしながら言葉を投げかける。声に少しとげがあるし目も鋭い

正直に言って子供がうろちょとしていることに色々と言いたいことがあるけど。まぁいいや、面倒だし

「なんで子供が…?まぁいいけど、こんな状況で殺すなんて怪しんでくださいって言ってるものでしょ。衝動的ならまだしも毒を盛ってる時点で計画をしていたみたいだし。誰かが彼に罪をかぶせようとしてるのが見え見えでしょ。それを狙ったなら凄いけど」

「た、確かに…」

聞いていたらしい目暮警部が納得する。ちょっと本当に大丈夫?

探偵上げるために警察が無能になり過ぎてない?

「じゃあお姉さんは犯人が分かるの?」

「確信はないけど」

「何ッ!?」

目暮警部と高木刑事がとても驚いた顔でこちらを見る。

まぁ、普通分からないよね。死体見ても私割と冷静だったから調べられたし。

私もコナン世界に染まっているのだろうか

「そ、それはいったい誰なのかね!」

「そーだよ!・なんでお姉さん言わないの!?」
　二人にそこまで言われるとは思わなかった。だって
「合っているかどうか分からないから」
「え?」
「私が言ったことが間違っていたら無実の人を疑ったことになるし、確信が持てているわけでもないしね。下手すれば名誉棄損よ」
　そうすると目暮警部は納得したような顔になる、コナンはまだ不満気だけど
　正直トリックはまだ分かってないし、証拠もない。
　ふと口元に手を当てる…ん?
　そういえば被害者はどの時点で手に毒がついた?
　トイレに行く前に毒が付いていたのならハンカチの時点で私にも毒が付いているだろうからそれない
　つまりはトイレでついた、でもコナン本編であったみたいなトイレットペーパーや芯につけても手を洗うし
　それで毒が流れたら意味がないし、下手をしたら別の人に被害が及ぶ
　暗殺者の才能を使え、その人物だけで毒殺するならどこに毒を付ける…
　…あ、そこか。そこならすぐに毒を拭き取れるしそこの席にした理由もわかる。

そしてそうしたなら証拠はまだ…
「なるほどね」
謎はすでに理解できた
でも正直自信満々に推理とか出来ないから私は女性に近づいて呟くように言う
トリックも完璧に分かったから間違いではないと確信できるし、まぁこんな計画を立てている時点で自首しなさそうだけどね
「自首なら早くした方がいいよ」
「えっ!?なっ、何を…」
「毒はトイレの内側のノブに仕掛けたんでしょ?そして被害者が触った後にすぐに毒を拭き取る。それを仕掛けやすい位置だしね」
私がそういうと女性はうろたえ始める。図星を突かれたように
「じょ、冗談じゃないわよ。この席に座っていただけで…そもそも毒はあの席から…」
「毒なら私の席からも見つかった、全部の席に仕掛けてたんでしょ。一個見つかったら他は探さないし」
「そ…それは…」
「それに、喫煙席なのに一本も吸ってないね。未成年である私とかならわかるけど。ウェイトレスに聞いたらわざわざ喫煙席を選んで座ったらしいね。しかもここ最近

ずっと。覚えられてたよ」
「た、たばこを切らしてて……」
「入口」
私が親指を向けると女性は入り口を見る、煙草の自動販売機がある。
異常なまでに種類があるため煙草がなくてもすぐに見つかるでしょ
「理由は簡単、あんたは煙草を吸わないから。何か言うことはある？」
「くっ！証拠！証拠はあるの!?」
大きな声出さないでよ、周りに気づかれ…ってもうみんな注目してる
「鞄」
「・・・え？」
「鞄の中、毒と毒を拭き取った布は指紋もついているだろうからソファの中に隠すわけにはいかないし。だったら鞄の中に入れたままにするよね。それに被害者とは顔見知りだろうし変装をする必要がある…地毛、見えてるよ」
そこまで言うと女性は床にぺたんと座り込む、高木刑事が失礼しますと鞄を探ると毒の入った瓶とふき取った布が出てきた。
そこからはとんとん拍子、自供して話しておしまい。
もちろん警察には私が謎を解いたとか私のことは出さないでって言っておいた。

「ねぇお姉さん、なんで警察に口止めしたの？」
「私は探偵じゃないし目立つのもやだしね、私は静かに生きたいの」
そういって別れた。呼びかける時に服のはし掴まれたけど本当に小学生みたいな行動するね。

そして帰り道、だいぶ遅くなったなぁと思ったら電話が来た。
見てみると外国の知り合い。転生前は英語も堪能だったらしく普通に喋れる。まぁ喋るのは日本語だけど
「Ｈｉ　元気？」
「あ、お久しぶりです」
「引っ越したらしいじゃない？連絡してくれないなんて寂しいじゃない？」
「落ち着いてから連絡しようと思ってたんです。米花町に引っ越しました」
「あら、奇遇ね。今米花町に今滞在しているのよ。よかったら今度の休日にでもお茶しない？」
「いいですね。場所が決まったらご連絡ください。休日はどちらも空いているので」
「ＯＫ　また連絡するわね。そういえば…またなっていたわよ。じゃあｂｙｅ
『赤服の少女（Lucky Girl）』」

「失礼します、『ベルモット』」
今日の私、全身黒服なんだけどなぁ…
教えてもらったけどまた電話中にノイズに走ってたみたいだし
携帯を仕舞って服を調べると服の端にとあるものが付いていた。見た感じ盗聴機とGPS
春川魔姫ちゃんはとてもとても美人だからストーカーなどがとても湧く、これは一回や二回ではない
とりあえずいつものをすることにした。
ここで突然話は代わるが春川魔姫の才能の暗殺者、これには声の暗殺というものがある。
相手に恐怖や不安を与え自殺や挙動不審などに追い込む技術である。
まぁ、殺す気はないから脅かす程度だけど。私は発信機に口を近づけて囁くように言う
「あんまりおいたしちゃだめよ」
そういうと私は発信機を近くの川へと投げ捨てた。
引っ越し初日からついてないなぁ…母さんにも連絡しないと…

謎の出典『魔人探偵脳噛ネウロ』第一話　手【て】

・保育士で暗殺者の転生者さん

前世の記憶はあるが実質知識でエピソード記憶はほとんどない

なので人格は　元の春川魔姫：6　ダンロンの春川魔姫：3　前世：1と言ったところである。

とても美少女（というか美人）なのでよくストーカーなどがわく、とても面倒に思っている。

赤い服も好きだけど黒い服の方が好きだったりする。

そういえば原作キャラにベルモットっていなかったっけ……？

・小学生で元高校生の探偵

全身黒服の女性がいてもしや…!となった。高校生と聞いてさらにびっくり
推理もしていたし途中わずかに殺気を発していたことに驚き発信機と盗聴器を仕掛けた。
電話を聞いたらベルモットと聞いて警戒心をマックスにする。
電話を切った後の春川魔姫の声に本気で恐怖心を憶える
後日転校してきたと蘭から聞いてやばいと思っている。
・電話口のお姉さん
ただの友人であり白側の友人だと思ってる。別に黒側の友人しかいないわけではない
出会いは本当に偶然で話をするまででもない感じ、たまに会ってお茶を飲む感じ。
着せ替え人形にするの楽しい、というかあれでノーメイクってどういうことなの!!

トリプルフェイスに遭遇した

「春川魔姫、よろしく」
帝丹高校に転入した私はよろしくする気は全くないといった感じで上のセリフを言った。
周りは唖然としている。そりゃそうだろう、楽しみにしていた転校生がこんなに不愛想なやつなのだ。指定されたのは窓際の席、これは都合がいい。静かにのんびりとさせてもらおう
「春川さん」
「なに?」
「よかったら一緒に弁当食べない?」
昼休み、昼食をとるかと弁当を取り出そうとすると声をかけられた。
毛利蘭と鈴木園子である、原作メンバーだ。
あぶれ気味の私に構ってくれているのだろうか。優しいいい子達である。
「いいけど」
「そっかぁ…やっぱだ…ってええっ!?」

「いいの!?春川さん!?」
「別に一人で食べるのが好きってわけでもないし」
ぶっちゃけ話し相手がいる方がいい、孤独が好きとか人と関わりたくないとかでもないし
弁当箱を取り出して机をくっつけた二人の前に置く。
「え、春川アンタそんなに食べんの?」
取り出した弁当箱は男子高校生でも満腹になれるぐらいの大きな弁当箱
高校一年生の後半からだろうか、とてもお腹が空くようになり食べる量がとても増えた。
その分運動も増やしたがそんなに体重は増えてない。適正よりも少し少ないぐらいである。
「これが普通」
「それでそのスタイルとか神様はひどいねぇ」
そんなこんなで雑談をしながら食事をする。
手にはいった情報は毛利の父は探偵、ポアロにカッコいい店員がいるなどなどの情報
安室さんはもういるのかな。あのハムサンドってやつ気になったから食べに行きたいな。

と言ったら「まだ食うんかい」と鈴木に言われた。解せぬ
学校帰りに寄ろうということになり、放課後二人についていくことになった。
道を憶えながら歩いているとふと毛利が語り掛ける
「そういえば春川さんってなんでこっちに引っ越してきたの？」
「親の仕事の都合、ありふれた理由だよ」
「へぇ、親は何してんの？」
「研究職って聞いたけど詳しくは知らない」
そんなたわいのない話をしているとポアロについた。
上には毛利探偵事務所が見える、おぉーすごい。ちょっと興奮
ちょっとコンクリートがヒビ入ったりしているのがリアルですごい
しかし目標はその下のポアロ、ガラス張りの店内を眺めながら扉を開ける
「いらっしゃいませ」
声をかけられた方を見ると金髪の男性が一人
うわ、安室さんだ。めっちゃイケメン、これで29歳って凄いな凄い若く見える
「紹介するわね、この人がこのポアロのイケメン店員！安室透さんよ！」
「えっと…こんにちは、鈴木さんご友人ですか？」
「あぁ、春川魔姫です。どうも」

と言いながら二人が座っている席に着きメニューを見る。美味しそう
「ハムサンドとナポリタン、食後に半熟ケーキとコーヒー」
「え、春川さん今17時だよ。そんなに食べて夕飯はいるの?」
「余裕」
女子高生というものは暇なときにはやたらとおしゃべりに興じるわけでして
頼んだしなが来るまでの間コイバナというやつをすることになった。
「へぇ、鈴木の彼氏ってあの京極真なんだ」
「そぉなのよ!カッコいいでしょう!」
京極真、格闘技をかじっているなら知っている人が多いだろう人物
私も少しかじっていたことがあったので名前は知っている。というかこの前テレビで見た。
がっつりテレビを見ていたのにここがコナン世界と気づかなかった自分に少し笑う。
そういえば怪盗キッドとかもいたのに気づかなかったな私、何か思い出すのにトリガーとかあるのだろうか
「っで、こっちの蘭の旦那があの工藤新一ってわけ」
「…え、結婚してたの?学生婚?」
「ちちち違うよ春川さん!もう!新一とはそういうのじゃないって!!」

いや、なんでくっつかないのか不思議だよ。
前に見た記憶があるプロサッカー選手脅迫事件のやつ、あれどう見ても彼氏の浮気に気づいた彼女だよ
「春川は誰かいないの？気になっている人とか」
「…いるよ」
そう、実はいるのである。ここに…というかこの世界にいるか分からないけど。
前世のせいなのかこのキャラが好きだというのがあったのだろうか。
この体を得てからはそれが恋愛感情に近いものになっている。
原作では百田が好きだったのにね…本当になんでだろう…いるかも分からない人を
「えっ！いるの!?」
「だれだれ!?」
「…いっても多分分からないと思うけど」
「いいからいいから！名前だけでも教えてよ！」
顔に熱が集まっているのが分かる…くっ、春川魔姫の赤面とか…レアだぞ
「……終一」
そう、私は最原終一が大好きなのだ…多分これ見つけたらまともに喋れなくぐらいには

二人がへぇ～という興味深そうな声を上げているとゴトンッ！という何かを落としたような大きな音が聞こえた。
視線を向けてみると店員の安室透がこちらを驚愕した表情でこちらを見ていた。どうしたんだろう
「どうかした？」
「あっ、いえっ。その人はどんな人なんですか？もしかしたら知っているかも…」
「あ、安室さんは探偵だから人脈が広いんだよ！」
そういえばそうだった、でもいるか分からない人を探させるのもなぁ…
「いや、いいよ。生きてるのかも分からないし…」
そうすると少しあっ…と言った雰囲気が出る、なんで？
…まぁ、いいか。ケーキもうまー
というか安室さんが凄い顔してこっち見てる。もはや睨んでる
私何かしたっけ…？うーん…まぁいいや
～～♪～～～～～♪
その時携帯にとある音楽が流れる。私の携帯だ
「…あ、電話だ。ちょっとごめんね」
「はーい」

席を立って少し離れたところに行く、別に会話を聞かれても問題ないけど。会話の邪魔になるかもだし

相手は父さんだった。なんだろ

「もしもし?どうしたの?」

『あぁ、魔姫。すまないが用意して欲しいものがあってな』

「いつもの?」

『そうだ』

うちの父さんはお酒が好きで特に洋酒が好きである、時々家に友人が来ることがあり。

自分は仕事が遅くなって用意が出来ないときに私に洋酒棚にあるお酒を出しておいてほしいという電話をしている。今回もそれだろう

いつものというと…ウイスキーか他にもあるかな

「お客さんって言ってたよね。他には?」

『そうだな…あとはジンとウォッカを用意しておいてくれ。母さんに言えばわかるから』

「分かった、ジンとウォッカね」

『頼んだぞ』

電話が切れる。うーん、食べ終わってるし今日はもう帰るかな
といって席に戻ろうとすると安室さんが物凄い目で見ていた。唖然と困惑とかが入り混じったような
「…どうかしました？」
「あっ、いやっ…何でもない…」
…変なの
「毛利、鈴木。家の用事が出来ちゃったから今日は帰るね」
「あれ、そうなの？」
「今日は付き合ってくれてありがとうね」
「じゃ、また明日」
バイバイと手を振りポアロを後にする。
また来てもいいかもなぁ…

・大食漢な暗殺者さん
噂のポアロの色々が食べられて満足、もちろん夕飯もしっかりと食べました。
家の父の部屋には洋酒棚が三つほどある。

お酒の名前も地味に詳しいのでベルモットのことはあだ名かなとか思ってる。

・旦那待ちの空手ガールさん
随分大人っぽい子が転校してきて驚いた。
でも話してみると意外にいい人みたいだし仲良くなれるかも
・実は周りが最強すぎるお嬢様さん
不愛想なやつかと思ったけどいい奴っぽい
・トリプルフェイスさん
代わった雰囲気の子だなとか思っていたらシュウイチとかジンとかウォッカとか出てきて大混乱している。
おい風見!!早く調査を急げ!!!
何ッ!?特におかしい所はないだと!?そんなはずはないだろう!